

日蓮大聖人御書全集

もくえにぞうかいげんのこと

木絵一像開眼之事

もくえにぞうかいげんのこと

木絵一像開眼之事

ぶんえいこうきいこう
文永後期以降

ほとけ さんじゅうにそうましま

仏に三十一相有す。皆色法なり。最下の千輻輪より終わ

り無見頂相に至るまでの三十一相は、可見有対色なれば、

書きつべし、作りつべし。梵音声の一相は、不可見無対色

なれば、書くべからず、作るべからず。仏の滅後は木画の

二像あり。これ三十一相にして梵音声かけたり。故に仏

にあらず。また心法かけたり。生身の仏と木画の二像を対

するに、天地雲泥なり。何ぞ、涅槃の後分には「生身の仏

ほとけ さんじゅういっそう いた か ほとけ せんふくりん お

めつご もくえ にぞう くどくさいとう
と滅後の木画の一像と功德齋等なり」というや。また

だいようらくきょう

もくえ にぞう しょうじん ほとけ

劣

大瓊珞経には「木画の一像は生身の仏にはおとれり」と

説

とけり。

もくえ

にぞう

ほとけ

まえ

きょう

お

木画の一像の仏の前に経を置けば、三十二相具足する

こころ

さんじゅうにそう

ぐ

なり。ただし、心なれば、三十二相を具すれども必ず

ほとけ

にんてん

さんじゅうにそう

かなら

もくえ

しも仏にあらず。人天も三十二相あるがゆえに。木絵の

さんじゅういっそう

まえ

ごかいきょう

お

ほとけ

りんおう

等

三十一相の前に五戒経を置けば、この仏は輪王とひとし。

じゅうぜんろん

お

たいしゃく

しゅつよくろん

十善論という置けば、帝釈とひとし。出欲論というを

お

ほとけ

まつた

ほとけ

置けば、梵王とひとし。全く仏にあらず。また、木絵一像

もくえにぞう

まえ あごんきょう お ほうどう はんにや いちじ
の前に阿含經を置けば、声聞とひとし。方等・般若の一時
いちえ ぐうはんにや お けごん ほうどう はんにや
一會の共般若を置けば、緣覺とひとし。華嚴・方等・般若の
べつ えん お ぼさつ まつた ほとけ
別・圓を置けば、菩薩とひとし。全く仏にあらず。
だいにちきょう こんごうちょうきょう そしつじきょうとう ぶつげん だいにち いん しんごん
大日經・金剛頂經・蘇悉地經等の仏眼、大日の印・真言
な ぶつげん だいにち
は、名は仏眼・大日といえども、その義は仏眼・大日にあ
れい ほとけ けごんきょう えんぶつ ぎ ぶつげん だいにち
らす。例せば、仏も華嚴經は圓仏にはあらず。名にはよら
な
ず。

さんじゅういつそう ほとけ まえ ほけきょう お ほうどう はんにや いちじ
三十一相の仏の前に法華經を置きたてまつれば、必ず
じゅんえん ほとけ うんぬん ゆえ ふげんきょう ほとけ かなら
純円の仏なり云々。故に、普賢經に法華經の仏を説いて
じゅんえん ほとけ うんぬん ゆえ ふげんきょう ほとけ と

云わく「仏の三種の身は、方等より生ず」文。この「方等」は方等部の方等にあらず。法華を方等といふなり。また云わく「この大乗經は、これ諸仏の眼なり。諸仏はこれに因つて五眼を具することを得たまえり」等云々。

法華經の文字は、仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたちとあらわしぬれば、顕・形の二色となれるなり。滅せる梵音声かえつて形をあらわして、文字と成つて衆生を利益するなり。人の声を出だすに二つあり。一には、自身は存ぜざれども、人をたぶらかさんがために声をい

だす。これは隨他意の声。自身の思いを声にあらわすことあり。されば、意が声とあらわる。意は心法、声は色法。心より色をあらわす。また声を聞いて心を知る。色法が心法を顯すなり。色心不二なるがゆえに而二とあらわれて、仏の御意あらわれて法華の文字となれり。文字変じてまた仏のみこころ御意となる。されば、法華経をよませ給わん人は、文字と思しめすことなかれ。すなわち仏の御意なり。故に、天台釈して云わく「請を受けて説く時は、ただこれ教意を説くのみ。教意はこれ仏意なり。仏意は即ちこれ仏智なり。仏智

いた
ふか
ゆえ
さんししそう
かんなん

よきよう
くら
よきよう
すなわ
やす
もん
しゃく
なか

余経に比ぶるに、余経は則ち易し』文。この釈の中に『仏

い
もう
しきほう
押
しんぼう
しゃく

意と申すは、色法をおさえて心法という稱なり。

法華經を心法ときためて三十一相の木絵の像に印す

ば、木絵二像の全体、生身の仏なり。草木成仏といえる

はこれなり。故に、天台は「一色一香も中道にあらざる」

となし」と云々。妙楽これをうけて釈するに、「しかるに

また、ともに色香中道を許せども、無情仮性は耳を惑わ
し心を驚かす」云々。華嚴の澄觀が天台の一念三千を

ぬすんで華厳にさしいれ、「法華・華厳とともに一念三千なり。

けごん
ねもと

先

後

ただし華厳は頓々、さきなれば。法華は漸頓、のちなれば。

けごん
とんとん

先

ほつけ
しよう
とう

華厳は根本、さきをしぬれば。法華は枝葉」等といふて、「我、

り
得

思

こころ
やま

理をえたり」とおもえる意、山の「ことし。しかりといえど

いちねんさんぜん
かんじん

そうもくじようぶつ

し

も、一念三千の肝心、草木成仏を知らざることを、妙樂の

わらい給えることなり。

いま
てんだい
がくしゃとう

われ
いちねんさんぜん
え

おも

今の天台の学者等、「我、一念三千を得たり」と思う。し

けごん

どう

かりといえども、法華をもつてあるいは華厳に同じ、ある

だいにちきょう
どう

ぎ

ぎ

るん

ちようかん
けん

い

いは大日經に同ず。その義を論ずるに、澄觀の見を出で

ぜんむい ふくう どう せん
い いま もくえ
にぞう しんごんし
くよう
じつぶつ
二像を真言師をもつてこれを供養すれば、実仏にあらずして権仏なり。権仏にもあらず、形は仏に似たれども、意は本の非情の草木なり。また本の非情の草木にもあらず、魔なり、鬼なり。真言師が邪義、印・真言と成つて、木絵二像の意と成れるゆえに。例せば、人の思い変じて石と成る、俱留と黄夫石がごとし。法華を心得たる人、木絵二像を開眼供養せざれば、家に主のなきに盜人が入り、人の死するにその身に鬼神入るがごとし。今、真言をもつて日本の

仏を供養すれば、鬼入つて人の命をうばう。鬼をば奪命者
といふ。魔入つて功德をうばう。魔をば奪功德者といふ。鬼
をあがむるゆえに、今生には國をほろぼす。魔をたつとむ
ゆえに、後生には無間獄に墮つ。

人死すれば魂去り、その身に鬼神入り替わつて子孫を
亡ぼす。餓鬼といふは我をくらうといふ、これなり。智者あ
つて法華經を讚歎して骨の魂となせば、死人の身は人身、
心は法身。生身得忍といふは法門これなり。華嚴・方等・
般若の圓をさとれる智者は、死人の骨を生身得忍と成す。

ねはんぎょう

み じんしん

こころ ぶっしん どう

ど

涅槃經に「身は人身なりといえども、心は仏心に同ず」と

しょうじんとくにん

げんしよう

じゅんだ

ほつけ

いえるは、これなり。生身得忍の現証は純陀なり。法華を

さと

ちしゃ

しこつ

くよう

しょうじんそくほっしん

悟れる智者、死骨を供養せば、生身即法身なり。これを即

しん

か

たましい

と

かえ

しこつ

い

か

身といふ。さりぬる魂を取り返して死骨に入れて、彼の

たましい

か

ぶつい

な

じょうぶつ

か

そくしん

にじ

魂を変えて仏意と成す。成仏これなり。即身の二字は

しきほう

じょうぶつ

にじ

しんぽう

しにん

しきしん

か

色法、成仏の二字は心法。死人の色心を変えて、無始の

みようきょう

みようち

な

すなわ

そくしんじょうぶつ

ゆえ

か

妙境・妙智と成す。これ則ち即身成仏なり。故に、法華経

い

しょほう

によぜそう

しにん

み

によぜしじょう

おな

に云わく「いわゆる諸法の、如是相（死人の身）・如是性（同

こころ

によぜたい

おな

しきしんとう

うんぬん

い

ふか

じく心）・如是体（同じく色心等）云々。また云わく「深く

罪福の相に達して、あまねく十方を照らしたもう。微妙の淨
き法身は、相を具せること三十二あり」等云々。上の二句は
生身得忍、下の一旬は即身成仏。即身成仏の手本は竜女
これなり。生身得忍の手本は純陀これなり。